

二〇一四年度入学試験問題 (第二回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから12ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答题紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。 「」はそれぞれ一字と考えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「明日のパン、買ってきて」

と夕子に言われ、本から顔を上げ、一樹は「ええつ」と顔をしかめた。

「ここ、読んじやってから」

なおも読み続けようとしたが、容赦なく本を取り上げられてしまった。主人公が、ようやく「影」と呼ばれる敵を追い詰め、さて、どうなるかというようないいところに限って、母親はそんな用事を言いつけるのだ。行くと行ってないのに、一樹に赤い財布を握らせて、

「いつものやつね」

と追いやられる。

一樹はしかたなく立ち上がり、

「アイス、買っていい？」

と聞くと、冷蔵庫に、肉やら野菜を詰めながら母は、

「私、ピーチ」と叫んだ。

玄関を開けると雨が降っていた。「あー、めんどくさい」と思いながら、自分の傘を探したが見当たらない。しかたがないから、母親の水玉のを傘立てから抜いて家を出た。

子供って損だなあとつくづく思う。自分が買い忘れたんだから、自分が行けばいいのに。だいたい、自分は朝にパンなんて食べたくないのだ。朝、起きると、だいぶん前に焼いたパンが、しなつとお皿にのっかっている。その情けない姿のパンに、バターを塗ろうが、ジャムを塗ろうが、少しもおいしくない。何のために、毎朝あんなものを食べなくてはならないのか、わけがわからない。弁当も、時々、ヘンなのが不意打ちのように登場する。到来物の巨大なマツタケの佃煮を、そのまんま、ドーンツとご飯の中に埋めてあったりするので、みんなに爆笑される。母のつくる弁当は油断ならない。なので、弁当のいるときはぎりぎりまで黙っていて、その日の朝になってから言うようにしている。母は昼食代を渡しながらか、「なんでもっと早く言わないのよ」と怒るが、お母さんのつくるものが恥ずかしいんだよ、と本当のことを言ってしまうと、いろいろ修復不能になるので、黙っているのである。

母がつくるものは、どこかぶかっこうで、流行おくれなのだ。服だって、みんなが着ているようなのは着せてもらえず、親戚からのお下がりの、古いセーターやズボンを書したものはかりだった。世の中は、今までになく景気がよ

かったので、古いものばかり着ている一樹は浮ういていた。

そうになると、自然と人とかかわらず、休み時間などは本を
読んで過ごすような子供になつてしまった。とにかく、一
人が一番気楽だった。一日、一度もしゃべらずに学校から
帰かえつて来ることもあった。一樹は、そんな子供だった。

傘aをさして歩あいていると、気持ちaが落おち着ちく。自分の傘
に雨粒あまつぶがはねる音が美しく、そう思うのは、もしかして自
分だけかもしれないと思つた。しかし、傘の中に一人でい
ると、そのことを恥はじる必要もない。自分Bの場所がはつき
りとわかる雨の日が好きだった。

いつものパン屋で、五枚切りを一食分買かひ、それを雨に
濡ぬらさないよう注意深く歩あいていると、突然とつぜん、後ろからば
しゃばしゃと水たまりをけちらす音が近づかいてきて、おか
っぱ頭の小学校低学年ぐらゐの女の子が、

「入れて下さい」
と傘の中に飛び込こんできた。

一樹が驚おどろいていると、女の子も驚おどろいた様子だった。傘の
柄がらが婦人物かだったので、女の人だと思おもい込んでいたのだろ
う。でもすぐ、人懐ひとなつっこい顔でニツと笑わつてみせた。よく
見ると、その子は、子犬を抱だいていた。女の子は、子犬が

濡ぬれないよう、不自然な形に体を傾かたむけ、一樹の歩調あしあひだに合わ
せながら、一生懸命いっしょうけんめいついてくる。女の子の濡ぬれた髪かみから、
汗あせの匂においなのか、蒸気あせのような何かなにかがむわつと傘の中に広
がり一樹の顔にかかつてくる。運動靴くつに雨水あめが入いつたの
か、歩あくたびにキュッキュツと音がして、それが女の子の
弾はむ息いきと同じリズムで、傘かさを持つ一樹にびつたりとついて
くる。

「この傘、いい音がするね」

女の子が、一樹を見上げて、大人びた様子でそう言いっ
た。下からにらむような黒目くろめがちの目で、

「私わたしのも、いい音なんだよね」

と自慢じまんした。女の子は、かすかにカレーの匂においがした。

「今日けふのお昼、カレーだったの？」

一樹が聞くと、女の子はへへと笑わつて、

「夕ゆふべのカレー」
と歌うたうように言いった。

「その犬、何なにて名前？」

一樹が尋たずねると、

「まだ決めてない」

と、女の子は子犬を優やさしくなでた。

「ふーん、そーなんだ」

「お兄ちゃんが持つてるのは、何て名前？」

女の子は、一樹が大事そうに持つているパンを見て聞いた。一樹は、ちよつと考えて、

「X」

と答えた。女の子は、突然、

「私、こつちだから」

とスカートに子犬をくるむと、雨の中へ飛び出して行った。細い足がびよんびよんと、泥をけり上げて走ってゆく。急に女の子は立ち止まると、こちらを向いて、

「パンつて名前にしていい？」

と大声で聞いた。

「いい名前だと思うよ」

一樹が叫ぶと、女の子は、また激しい雨をものともせず走り抜けて行った。その後ろ姿を一樹は、呆然と見送った。何だつたんだ、今のは。一瞬、自分も小さな子犬を抱き上げたような、不思議な気持ちだった。

この日の話は、誰にもしていない。していないが、その後もなぜかずつと心に残った。雨の中、水たまりをはねのけるように、地面をけつていた、あの小さな足はなんだつ

たんだらう。

一樹が十七才の時、母が亡くなった。ちょうど反抗期で、もつとやさしくしたかったが、急にそんな事ができるような年頃ではなかった。突つ張つたままの息子で、母親は突然、逝つてしまった。いなくなつてしまつて、母という通訳がいて、ようやく父親と話せていたのだ、と一樹は気づいた。たぶん、それは向こうも同じことを思つていたのだらう。共通の言葉を持たない二人は、必要なことしかなさなかつた。何日までにお金を振り込まねばならないとか、鍵はどこに置いておくからとか。見るテレビも、好きな食べものも、寝る時間も、全部違うのだ。母が亡くなつて、家の中のものは、急速に色を失つていった。特に母がよく使つていたものは、その持ち主がいなくなつたといふだけで、茶碗も、鏡台も、イスも、そのイスに敷かれていた座布団も、かつては、生き生きとそこにあつたはずのもの、誰も行かない博物館にひっそりと置かれてあるようなものになつてしまつた。

一樹は、はつきり言つて家になんか、いたくなかつた。何を聞いても、「いいんじゃないか」としか言わない父と、

ほこりだけがたまってゆく陰気くさい家。もつと明るい場所
所にいたかった。デパートみたいなのに、いつ行っても明るく
て、きれいで、ピカピカで、親切で、みんなが楽しそうに
笑っている場所。バイトに精を出し、車を買って、その車
に女の子を乗せ、海や街で遊んだ。くたくたになるまで、
気のあつた友人たちとダラダラしゃべったり、黙ったり、
酔っぱらったり、ケンカしたり、仲直りしたりするのは楽
しかった。楽しいはずだった。なのに、遊びは、どこまで
いっても遊びのまま、いつも同じことの繰り返しだと気
づく時がある。そんな時、ふいに、冷たく、動かなくなつ
た母を思い出す。あの時の、恐ろしいほどの悲しさが、ふ
いにおそいかかってくる。みんなと次の店を決めている
時、街で誰かを待っている時、雑貨屋で女の子とふざけて
いる時。そうになると、体は硬直し、全身が悲しみにおお
われる。何も考えられなくなる。そして、やがて自分も、
あのほこりだらけの陰気な家のように、全てが止まってし
まう気がするのだった。

その日も、そんな気分におちいって、最初は友人たちと
一緒に騒いでいたのに、結局一人になってしまつて、酒な
ど飲みたくもないのになお飲み、わけのわからない自己

嫌悪でいっぱいだった。

店を出ると、もう朝で、雨が降っていた。乗ってきた車
はそのまま置いて、車内に置きっぱなしの傘があつたの
で、歩いて帰ることにした。夜はそう思わなかったが、明
らくなつてくると、やたらゴミのある汚い街だった。電車
に乗ると、その横で出勤するサラリーマンが英会話か何か
のテープを聞いている。本当に息をしているのだろうか
思うほど、電車の中の人は止まったままだった。

電車を降りて傘をさす。傘に雨粒の当たる音がする。

この音を聞いているのは、地球で自分ひとりだと、ふい
に気づき、とてつもない寂しさに吐き気をもよおす。その
時、向こうからやってきた女子高生が、一樹を見て、立ち
止まり、

「あッ」

と指さした。正確には、一樹の水玉の傘を見て、「あッ」と
なったのだが、女の子は自分の無作法に、突然恥ずかしく
なったのか、

「すみません。すみません」

と頭を下げて、逃げて行った。

水たまりの地面をける足を見て、一樹も「あッ」となつ

た。昔々、「夕べのカレー」と言ったあの子だ、と思った。

一樹は、女の子を追いかけた。女の子の足は猫ねこのように、しなやかで、力強く、前へ前へとなめらかに動いてゆく。

追いかけている間に、一樹は、自分が何を求めていたか思い出さず、母はいつも動いていた。洗濯物せんたくものを干したり、台所で何かを刻んだり、庭の草を引いたり、縁側えんがわで布団を広げていたり。止まっている姿など一度も見たことがなかった。

たまたま用事を言われ、一樹がふてくされた顔を見ると、「動くことは生きること。生きるとは動くこと」と怖い顔で怒おこった。

「この世に、損も得もありません」
それが母の口癖くちくせだった。

一樹は風と雨に顔を打たれながら、今度こそつかまえないければ、と思った。母の時みために、バカみたいにかっこをつけていたら、大事な物がするりと腕うでからこぼれてしまう。今度こそ、恥も外聞もなく、待つてくれと頼たのむのだ。一樹が手を伸ばし、女の子のあさ黒くて柔らかな二の腕をようやくつかむと、女の子は驚いて立ち止まった。

「子犬、抱いてた子でしょ？」

切れそうな息で一樹がそう言うと、女の子は、

「覚えてたの？」

と驚いた。

「あの時の犬、どうした？」

本当は聞きたいのはそんなことではなかったが、女の子は、

「パンは生きてるよ」

と言った。やっぱり、「パン」とつけたんだと、嬉うれしかった。もつと、もつと、いろいろ話がかかった。とにかく、息をととのえなくてはならない。自分の心臓の、ドクドクという音が、おさまるのを待った。待ちながら、一樹は、

「自分は、今、間違いなく生きています」と思った。

(木皿泉「一樹」による)

【注】

*到来物——もらいもの。いただきもの。

問一 — 線部A「そうになると、自然と人とかかわらず、休み時間などは本を読んで過ごすような子供になってしまった」とあるが、「人とかかわら」なくなった直接的な原因と、その背景にある理由を説明しなさい。

問二 — 線部B「自分の場所がはつきりとわかる雨の日が好きだった」とあるが、彼にとっての「自分の場所」とはどのような場所か、二つ答えなさい。

問三 X について、一樹は、ちょっと考えてから何と言ったと思いますか。女の子の台詞せりふを参考にして、五字で答えなさい。

問四 — 線部C「自分も小さな子犬を抱き上げたような」とは、一樹が女の子が傘に入ってくることを拒絶きよつしなかったことだと考えられますが、一樹が拒絶しなかった理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 女の子も自分と同じく傘の音に注目したので、価値観を共有できていると感じたから。

イ 女の子が細い足でびよんびよん泥をけり上げて走っていく様子が、子犬のようだったから。

ウ 一樹の顔を見て驚いていたはずの女の子が、人懐っこい顔でニツと笑えるほど愛想がよかったから。

エ 一樹の歩調に合わせて一生懸命ついてくる女の子を見て、自分しか守ってあげられないと思ったから。

問五 — 線部D「生き生きとそこにあっただはずのものが、誰も行かない博物館にひっそりと置かれているようなものになってしまった」と、同じ意味の比喩表現ひゆを本文中から抜き出しなさい。

問六 〰️線部 a・b には雨音を聞いている一樹の気持ちを書かれている。子供の頃は肯定的こうていできに聞いていた雨音を、大人になつて」とつともない寂しさに吐き気をもよおす」と否定的に受け取っているのはなぜか、説明しなさい。

問七 — 線部 E「一樹は、自分が何を求めていたかを思い知る」とあるが、一樹は何を求め、何を思い知ったのか、思い知つた理由を含めて、七十五字以内で説明しなさい。

問八 このあとの一樹の生き方によつたような変化が起こったのか、考えて書きなさい。ただし、これまでの話の展開と、— 線部 F「パンは生きてるよ」、— 線部 G「自分は、今、間違いなく生きてる」という二人の台詞を参考にして考えること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

幕の内弁当の好感のもてる理由のひとつは、たくさんの中味Ⅱ具のどれひとつとつてみても平凡へいげんである、というところではないだろうか。それが、日本人の生き方の術すべとコオウくわうするものがあるのではないか。容器ようきというものはそれ自体、救いの構造をもっている。中に取りこまれたものは必ず活いきる。この容器性Aが日本的なる組織にもさまざまな形で見出されるのである。

幕の内の中味は、どれもが等価で、とびぬけて価値あるもの、位の高いもの、というものがない。いわば【一】。とりたてて天才てんさいはいないのである。天下をとった秀吉*ひでよしは、尊敬されるよりも親しまれ、大衆たいしゅうは案外対等なつもりでつき合っている。出自*の違いは認めるにしても、基本的にものみな等価とみるところから組織を組み立てている。学閥*がくぼつ、閥閥*けいぼつなどというものもあるにはあるが、完全な差別の構造にはなっていない。構成要素がみな等価でありながら、しかもそれぞれ、特異性、個性の名において位置しを占める、という形で組織化がはかられる。

人の見立て方うまの上手さによって、専門性よりも個性ある

いはとり、えとといったごく人間的な素質によって活かされていく。この暗黙あんもくの理解によって、無能な者も、それぞれ位置を得て、ちゃんと機能していける。これが日本の生き方の術として、重要なところなのである。

社員を機能でとらえる米国Bなどでは考えられないような人事が日本で行なわれているのは、組織における人間関係づくりに、時間がかけられているからである。会社員は、一生かけて、はなはだしきは親子二代、あるいは三代といったスパン*で会社とつき合っている。代議士でも、未亡人、息子むすこが後継者こうけいしやたらんとする。これも地域との関係づくりに費やされたタイムスパンの長さ*しかの然らしむところである。もちろん、こうした人間関係のしがらみが、はなはだしい不都合を生じる場合も多いから、その得失はある。しかし関係づくり組織Cづくりに時間をかけること自体は、関係の殺伐*ころはつさを救う点では、かえって未来的である。

幕の内弁当は、こうした社会的な組織のあり方の、ひな型*のような観ていを呈する。何でも取りこんで立場を失わせることがない、平凡なものを集めて全体を非凡ひびんに統一する、その背景には、食べ物と食べ物との関係をさえ、長い歲月さいげつをかけて見立ててきた歴史がある。ものを、かたちを、こ

とばを、ひとを、長い歳月をかけて見立ててくると、平凡なものもすべて非凡になる。すべてが非凡なら、非凡であることも平凡である。

花と花、食べ物と食べ物、人と人との取り合わせ。取り合わせによって、新たな関係を生む^②クフウは芸道から飲食、そして社会組織にまで援用^{*えんよう}されている。そこに常に通じているのは、相当なものを取り合わせても、存外うまく合うのではないか、という確信である。これは、砂漠^{さばく}でない国の人々の、ものの見方の特徴^{とくちゆう}であろう。イスラム教の徹底^{てっぴ}した一神教に比べればヨーロッパの宗教は多神教というに近い。環境^{かんきやう}の構成要素が増えれば、それだけ神様の種類も増える。日本の場合には、万物、一木一草を神とおいて認識していかなければ、整理がつかなくなる。変な取り合わせでも、見様によつては収まりがつく。これは複雑な自然の生態を見つけてきた民族の直感^{ちくかん}であろう。

幕の内弁当には、なぜ^Dたくさんのおかず^{かんせき}具が入っているのだろうか。それらは偶然^{ぐうぜん}、何の気なしに入ってきたのではない。それぞれが用意^{ようい}され、質^{あたい}が吟味^{ぎんみ}され、形状が整えられ、配置が考えられて入ってきている。幕の内なる世界は意図^{いどう}され設計^{けいけい}されたとおりに作られた完璧^{かんぺき}な人工環境

なのである。人工環境は、身辺の自然環境の理想像^③である。我々を取り巻く自然環境の質が、たいへん高いミツド^③をもっているために、眼下^{*}に広がる一尺四方の景観をさまざまにするのに、二十余種の神々を招きこまねば、要素が十分でなかった、ということである。それだけ集めないと、ひとつのムードができない。それだけの要素をまとめて初めて、ひとつのムードを感じる。

日本人の感覚はたいへん微視^{*びし}的であり、その視野自体が幕の内的になつているのである。

1 病葉^{*わづらば}が流れ

ゆくのを見て人生の秋を知る。一枚の葉が枯^かれ落ちる。そこに感知した秋の質をいう。こんな微視^{びし}的なところに、幕の内構造の一番大きな枠^{わく}である「此岸^{*しがん}、この世」を感じる。ここに万物を非凡な平凡とみる感覚がある。

桐^{きり}一葉、楓^{かえで}の葉、柿^{かき}の葉、樺^{けやき}の葉、松の葉、それぞれが秋の一要素となる。青い空、鱗^{いり}雲、山々の紅葉、風の冷たさ、陽^ひの弱さ、稲^{いね}の穂^ほ、秋茄子^{あきなす}の紫、秋刀魚^{あきさま}の煙^{けいり}、何千、何万という小さな秋が集まって、天下は秋となる。この小さな秋を、いわば部品として組み立てると、人さまざまの秋が、三十一文字^{*}に表現されるのである。

米国の場合、同じ箱^{はこ}を器とするにしても、米国の自然観

にしたがって、とてつもなく大きなピフテキ、

2

丸々としたジャガイモが鎮座することになる。こうした
風景を思い浮かべてみると、米国の自然観と日本のそれと
の違いは歴然たるものがある。

幕の内のおかずは具は、どれも小さく切られており、
ひとくちで口の中に入れてしまう。握り飯も刺身も芋も、
みなひとくちの大きさ。それは箸でつまみやすいから、食
べやすいからという説明がある。確かにそうであろう。

3

、具を小さく切ることの意味はこれだけでは
ない。小さく切ると組織化しやすくなる。分解しておい
てから組み立てるところに、組織化の術が入っている。小さ
く切ったものを単位とするからこそ、三々五々とリズムカ
ルな配置も可能になる。

いろいろな要素の雑居をいとわないのは、方一尺に二十
余の神々をみてきた体験からくる自信であろう。この自信
はマイナス要因として働くことが多い。何でも取りこん
で、収まりがついていないのを気にとめない。これを第三
者の眼からみると、おぞましいコンランに見える。

欧米人に比べて、アジア人は集団生活がうまい、と言わ
れている。欧米人は集団生活が下手なので、目に見える組

織化をはかる。アジアの多角的農業は一人ではできず、常
に集団の力を借りてウンエイしなければならなかったか
ら、集団生活がうまくなったのである。牧畜は一人でも
できる。ヨーロッパの農奴制は、一人でできる管理を拡大
したものである。

日本の場合、ごく最近までの農業は、上部の組織とはま
ったく別に自律的に、集落の生存をかけた自治が行われて
きた。集落では、回り持ちでの役割分担につきものの不公
平は、アニミズムの祭りでもまとめた。儀式で、歌で、祭り
でまとめ、その辺で手を打ったのである。村の幕の内を、
美しくまとめることで決着をつけてきた。この辺が、幕の
内構造のもつ、非組織的な組織力の真骨頂なのである。

(榮久庵憲司『幕の内弁当の美学』による)

【注】

*秀吉——豊臣秀吉。

*出自——出身。

*学閥——学問や学校などの出身。

*閥閥——妻の親類などの出身。

*スパン——期間。

*然らしむる——そうさせる。

*殺伐さ——人を傷つけたりしても何とも思わないような

あらつばい様子。

*観を呈する——様子を表す。

*援用——自説を助けるために他から引用すること。

*吟味——品質などを確かめること。

*一尺——三〇・三センチ。

*微視的——見方が細かいこと。

*病葉——枯れかかった葉。

*此岸——現世。

*三十一文字——和歌。短歌。

*鎮座——重々しく座っていること。

*歴然たる——はっきりしていること。

*おぞましい——ぞっとするような。

*アニミズム——動植物など、自然界のすべてのものに霊

魂や精霊があると信ずること。精霊信

仰。

*真骨頂——本当の姿。

問一

1

3

にあてはまることを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア さて イ しかし ウ だから エ たとえば オ また

問二 【 】にあてはまることを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 青は藍あゐより出でて藍よりも青し イ 虻蜂あぶはちとらず ウ 竹馬の友 エ どんぐりの背くらべ

問三 ——線部A「この容器性」とあるが、これはどのような構造をもっているか、簡単に説明しなさい。

問四 — 線部B「米国などでは考えられないような人事が日本で行なわれている」とあるが、筆者は、日本の「人事」で重視されるものとはどんなものだと述べているか、次の中から二つを選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 学閥 イ 神様 ウ 閥閥 エ 専門性 オ 人間関係 カ 人間的な資質 キ 民族

問五 — 線部C「関係の殺伐さを救う点では、かえって未来的である」とはどういうことか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 組織における人間関係がより簡略化されるため、今後両者の関係がしがらみをもたずにするということ。
イ 組織における人間関係がより強化されるため、今後両者の関係が発展する可能性をもつということ。
ウ 組織における人間関係がより単純化されるため、今後両者の関係が飛躍に向けて動き出すということ。
エ 組織における人間関係がより複雑化されるため、今後両者の関係が悩みの種にならずにするということ。
オ 組織における人間関係がより明確化されるため、今後両者の関係が現状のまま維持できるということ。

問六 — 線部D「たくさんのおかず」具」とあるが、「幕の内弁当」の「おかず」具」の特色を簡単に説明しなさい。

問七 — 線部E「幕の内構造のもつ、非組織的な組織力」とあるが、「幕の内弁当」と日本特有の社会的な組織「村」のあり方の類似点を七十五字以内で説明しなさい。

問八 〜〜線部①⑤のカタカナを漢字に直しなさい。